

百合の花の巻

女性の美しい立ち振る舞いや容姿を「立てば芍薬座れば牡丹」に次いで「歩く姿は百合の花」と表現されるどころ、また「ユリ」の中国語表現が日本の漢字表現と同じ「百合(bǎihé)」であることからすると、百合は中国原産の花のような気がしますが、実は、北半球のアジアを中心にヨーロッパ、北アメリカなどの亜熱帯から温帯、亜寒帯にかけて広く分布していて、原種は100種以上、品種は約130品種(アジア71種、北アメリカ37種、ヨーロッパ12種、ユーラシア大陸10種)もあったんですね。芍薬と牡丹を「東洋のスター」だとすれば百合はバラと並び称される「世界のスター」なのだということに改めて思い至られます。



しかし、「ユリ(百合)」は、ユリ目ユリ科のうち主としてユリ属(学名: *Lilium*)の多年草の総称であるだけに、全体的には「世界のスター」であったとしても、個々の国の人々にとってはそれぞれの国で自生する特産種のユリが「我が国のスター」として愛されてきた可能性があります。特に日本は美しいユリの自生地が非常に豊かであったので「重要な原種ユリの宝庫！」とされています。古事記に「神武天皇がユリを摘んでいる娘に惚れて嫁にした」という物語があり、これが日本の歴史上で最古のユリに関する記述なのだそうですが、この物語の舞台が奈良の三輪山の麓とされているだけに、分布などを鑑みると、このユリは本州中部地方以西から四国・九州に分布する日本の原種ユリのササユリであったものと思われる。



聖母マリアを象徴する白ユリは「マドンナ・リリー」と呼ばれ、受胎告知図に盛んに描かれてきました。最も美しい花であると同時に「神聖な植物」としてローマ法王の庭にも植えられていたそうですよ。もともとは「ニワシロユリ」を「マドンナ・リリー」と呼んでいましたが、幕末に、ドイツ人医師シーボルトにより日本の「テッポウユリ」がヨーロッパにもたらされ「イースター・リリー」と呼ばれて人気になったことから、現在では「ニワシロユリ」ではなく「テッポウユリ」を「マドンナ・リリー」と呼ぶことが多くなっているようです。



琉球列島原産の日本特産「テッポウユリ」が、いまやキリスト教の行事に欠かせない花となっているというのはちよいと嬉しい話ですね。花の形が鉄砲に似ているからと言って「テッポウユリ」などという“無鉄砲”な呼び方をされているのが残念ですが。

不詳私の百合との出会いも、日本国産種の「ヤマユリ」との出会いでした。神奈川県花ともなっているヤマユリの美しい花姿に惹かれて、高校時代のある春先に、小峰の山道にその球根を掘りに出かけた際に、球根とともに小さな蛇が飛び出してきたのに驚きました。蛇とともに冬眠していたようですね。「ヤマユリ」は“野趣あふれるユリの王様”とも言われますが、「なんというすごい自生の仕方をしているのだ！」と思える出会いでした。ヤマユリは、山中に生えることからつけられた名前ですが北陸地方を除く本州の近畿地方以北の山地に分布しているのですが、神奈川県が昭和26年1月に県民の投票によって、全国の中でいち早く県花に指定したのだそうです。爽やかですね、往年の神奈川県政。



「百合」といえば、花姿とともにその香りの良さを愛でる人も多いようですね。例によって「百合で一句」と話しかけた即興俳人の高幡大馬王殿は冒頭に「百合と言えば、一番最初にいつも思い出してしまうのはその香りで、38年前に悪性リンパ腫で亡くなった父の病室にお見舞いとして飾ってあった景色です。本当は、香りが強いのでお見舞いには避けるべき花なのだそうですが、父は気に入っていたようでした。」というメッセージを冒頭につけて次のような句を送ってくれました。百合の花言葉は「純粹」「無垢」「威厳」です。我が子と百合の花を愛しておられたお父様との間には「純粹」「無垢」な心の通い合いがあったに違いありません。

百合香る タイムリープの 始まん 高幡大馬王

百合の強い香りはヒトの間隔を麻痺させて、タイムリープ(時間跳躍)させるスイッチのような気がします。

また、日本各地で愛される花だけに、「百合ヶ丘」などといった百合入りの地名も方々にあるようですね。私たちの世代なら、沖縄県糸満市にあるひめゆり学徒・教師の慰霊碑「ひめゆりの塔」を知らない人はいないでしょうし、小田原に育った男児なら「白百合学園」の名に惹かれたことがあるのではないかと思います。女性の名前にも、百合、百合子、百合香、早百合といった名前が多く、また、英語名の「リリー(Lily)」も言葉の響きがいよこともあって「凜々花(りりか)」などという名前もあります。百合の優雅で気品に満ちた花姿と素晴らしい芳香からすれば、親が「百合のような女の子に育ててほしい」という気持ちになるのも当然のように思えます。そしてこの流れの中から、私も含めた多くのサユリストを生み出した吉永小百合さんと東京都知事の小池百合子女史といったビッグネームが誕生したわけですね。

そして、高幡大馬王殿は、このビッグネームの一方を、「百合と言えば 永遠の美貌 吉永小百合(78歳)」と評して次の句を送ってくれました。

百合の香に 酔って信じて サユリスト 高幡大馬王

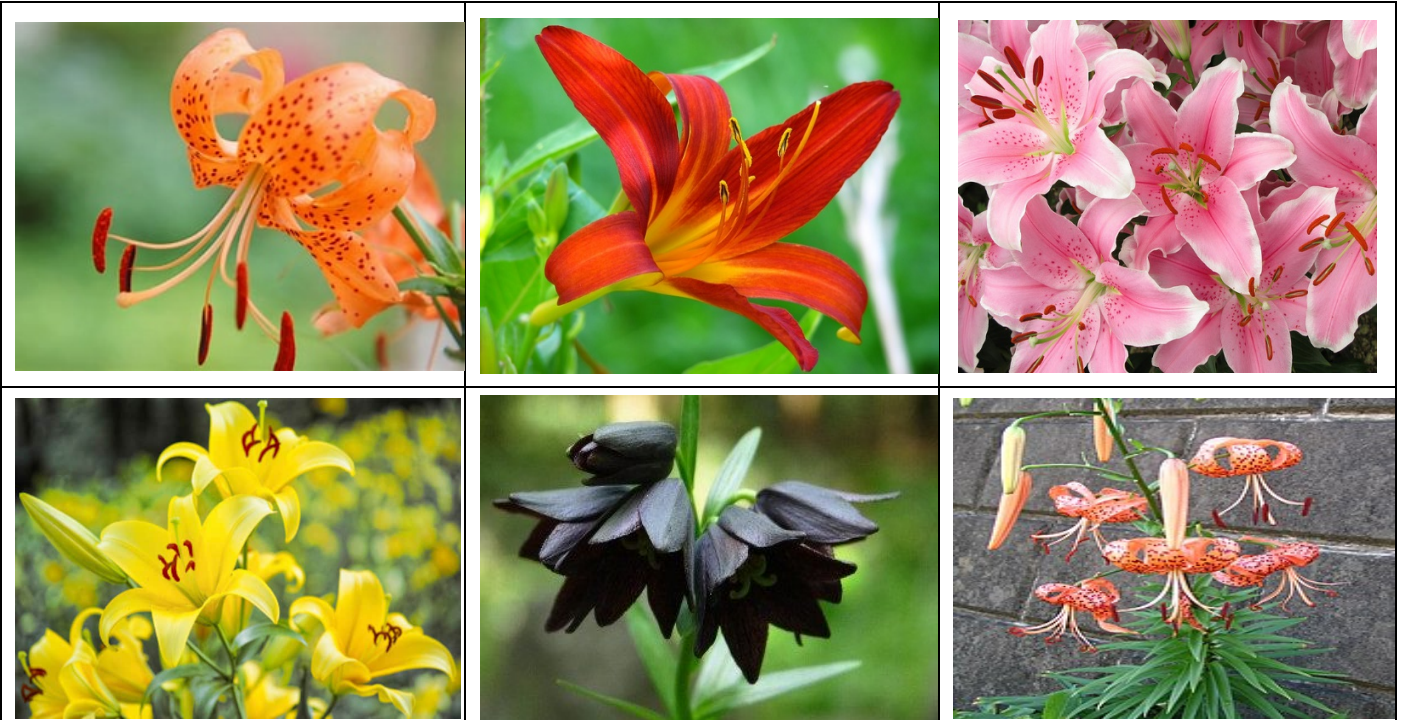
また、「花の言葉に耳寄せて」Part 17の「芍薬と天海祐希」に呼応して、「天海祐希と同年代で、こちらはほっとする女優石田ゆり子(53歳)でも一句」というメッセージ付きで次の句を加えてくれました。

白百合や 石田ゆり子の 優しき瞳(め) 高幡大馬王

しかし、その昔「岸壁の母」を歌っていた双葉百合子(91歳)でも一句頑張ろうと思ったのだそうですが私の短兵急な短納期出荷要請には応じきれなかったようです。更に、もう一方のビッグネームの小池百合子女史についてはまったく俳句の対象外とでも見ていたのでしょうか、高幡大馬王殿の“百合名仲間”から外れていました。

ビッグネームなのに吉永小百合さんのお名前には“小”の字がついていますね。しかし、「小百合」という種はないようです。一般的には「小」は「小さい」という意味をあらわす接頭語ですが、吉永小百合さんの立ち居振る舞いを見ていると「つつましやか」で「上品」で「謙虚」な人を意味する接頭語のように思え、百合の花言葉にも「純粹」「無垢」「威厳」だけでなく「つつましやか」「上品」「謙虚」が加わってきそうな感じがしますね。

しかし、百合の世界には、百合全体の花言葉の「純粹」「無垢」「威厳」とは別に、「華麗」「愉快」という花言葉のオレンジ色の百合、「虚栄心」という花言葉が付いた赤とピンクの百合、そして「陽気」「偽り」「飾らぬ美」という花言葉を持つ黄色の百合があります。かてて加えて、かつて織井茂子さんが♪黒百合は恋の花♪と歌った黒百合まであるのですから百合の世界はまさに“百花繚乱”。黒百合の花言葉「恋心」「呪い」に加えて、様々な色合いの花姿を持つ鬼百合にも「華麗」「愉快」「陽気」「誇り」、そして「賢者」といった花言葉があるので、「百の花言葉繚乱」ともいえそうです。



「ゆり」という名前は、細い茎に大きな花がつくので風に揺れることから「揺る」「揺すり」から来ているようですが、花形とは関係なく“百”の(たくさんの)鱗片が重なり“合”った様に由来する中国語の「百合」がそのまま「ゆり」の当て字として用いられているところを見ると、もともと百合は、中国そして日本でも、「花を愛でる」のではなく「鱗片を食用または薬用にする」ために用いられていたのだらうと思っていました。自生しているだけで、観賞用として栽培されるようになったのは、室町時代に入ってスカシユリ、ヒメユリが茶の湯や、挿し花等に用いられるようになってからで、庶民が庭先の鉢植えとして楽しむようになったのは江戸時代に入ってからのことだそうですからね。しかし、「百花繚乱」および「百の花言葉繚乱」の事態を考えてみますと、「ゆり」を「百合」と表記するのは、「ゆり」が「百」の(たくさんの)種のユリの集“合”だからなのだ」と思いたくなってきてしまいました。